

研究動向

現代社会の中の芸術 —— 複眼的視点から芸術を考える

大野 芳材

芸術はそれが生み出される時代や社会と深く関わりを持っている。ラファエロの活動はユリウス2世とレオ10世というふたりの教皇の存在を抜きには考えられないし、モネやルノワールなど印象派の画家たちは産業革命後の近代都市を背景に活動した。ピカソの「ゲルニカ」は、ドイツ軍のスペインの小村ゲルニカへの爆撃に対する、強い非難の意志の表明であったこともよく知られている。すでに歴史的評価の定まった作家や作品を研究することももちろん大切なことではあるが、私たちが生きて活動しているこの時代がいかなる芸術を生み出し、創造にどのように働きかけているかを考えるのもまた重要であろう。

このプロジェクトを専門分野が芸術の領域とは限らない、多岐にわたった6名の研究者で立ち上げたのは、それぞれの専門の知識を理解し共有することを通して、上記のように、今日の芸術と社会の関わりを様々な視点から解きほぐそうと考えたからである。所員及び客員研究員のそれぞれの研究テーマの概略は次の通りである。

大野芳材 「美術教育の歴史と現状、日本の明治以降の美術教育を中心に」

廣田道夫 「地球温暖化問題と環境芸術」

阿久津光子 「ジャカードという表現」

趙 慶姫 「都市環境と芸術—地下鉄空間のアート」

杉田隠子 「21世紀エイブルアートを通してみる障害のある人の表現」

田中 佳 「芸術の社会的受容—美術館をめ

ぐる問題を中心に」

私たちはメンバーそれぞれの研究領域の知識を共有することを目的に、所員による研究会と、外部から専門の研究者を招いた講演会を2010年度には合わせて5回開催した。

研究会は次の2回である。

①大野芳材「フランスの美術アカデミー」(6月1日)

②廣田道夫「地球温暖化」(10月12日)

大野は美術と社会の関わりのひとつのケーススタディとして、17世紀のパリに創設された美術アカデミーを取り上げて説明した。廣田は多くの観測データを取り上げて温暖化の実態を示し、今日の都市空間や自然環境との相関の中で、それに対する対応がどうあるべきかを話した。環境と芸術という問題を考える上で、示唆的であった。

講演会は次の3回である。

①工藤安代(NPO法人アート&ソサイエティ研究センター代表理事)

清水裕子(NPO法人アート&ソサイエティ研究センター副代表理事/空間造形コンサルタント、アートディレクター)

「芸術文化と社会の関係」

Part1「現代都市空間における芸術文化の諸実践について」

Part2「環境アート—サステナビリティについて考え行動するアート」(7月13日)

②小林瑞恵(社会福祉法人愛成会 アートディレクター)

「アール・ブリュットからみる人の普遍的

な表現の可能性」(12月7日)

③山梨絵美子(東京文化財研究所、近・現代視覚芸術研究室長)

「明治期における日本の美術教育—工部美術学校から東京美術学校へ」(2011年1月25日)

工藤氏と清水氏は、1893年のシカゴ万国博覧会の都市美化運動(ダニエル・バーナム)をパブリック・アートのひとつの原点として、1959年にフィラデルフィア市で制定された「パーセント・フォー・アーツ条例」(公共事業の建設費の1パーセントほどを美術作品に費やすことを決める)の全米への拡大などを例に挙げて、その展開を多くのスライドで紹介した。日本でも彫刻のある町作りなど、とりわけバブル経済期にパブリック・アートが大きく展開したという。人を中心として、都市と自然と社会をどのように結びつけるかが、これからのパブリック・アートの課題だという結論である。

小林氏はパリで開かれていた日本のアール・ブリュットの作品の展覧会から帰国したばかりで、その展示を例に、アール・ブリュットとは何か、その歴史と特徴についての講演である。アール・ブリュットは、フランスの美術家デュビュッフが、知的障害者や専門教育を受けていない素人の絵や落書きを評価する言葉である。氏自身の活動の経験から、日本の障害者たちとの交わりを通して、そうした作品が生み出される過程や彼らの創造力の豊かさが紹介された。

山梨氏は明治時代以降の日本の西洋美術の受容を、教育を通してふたつの点から説明した。ひとつはフォンタネージなどイタリアの美術家を招いて明治9年に開校した工部美術学校である。もうひとつは、国粋主義の台頭によるその廃校後に、フランスに留学していた黒田清輝の帰国後に創設された東京美術学校西洋画科である。黒田は教授に迎えられて多くの学生を育てたが、フランスで学んだアカデミックな絵画理論は多くの影響を与えず、一方、印象派風の表現は多くの追随者を生み出した、という指

摘は同時期の日本の絵画の展開を考える時に興味深い。

こうした研究会と講演を通して得られた成果に基づき、2011年度はそれを個々に深めていくことが課題である。また3月の東北の大震災と原子力発電所の事故は、今日の芸術と社会を考える時に避けて通れない問題である。そうしたことを念頭に置きながら、前期には次のふたつの講演会を行った。

①中野恵美子(織造形作家、元東京造形大学教授)

「錦織からコンピュータジャカードへ—人は如何にして経糸と緯糸で文様を織り出してきたか、その工夫の跡を探る」

②廣瀬勝巳(元気象庁気象研究所地球化学研究部部長、上智大学理工学部客員教授)

「過去の大規模環境放射能汚染と福島第一原子力発電所事故」

中野氏はまず初めに布を織るという行為が人間にとってどのように位置づけられるか、歴史の中で検証した。アジアで織られた布が、日本に招来されて残る正倉院の御物などを通して、人の営みと織物の深く長い関わりが明かされる。さらに作家という立場から、フランスのジャカルが19世紀初頭に発明した紋紙を用いたジャカード機が、今日ではコンピュータと連動して手織りで製作されるようになった過程を、氏の作品を交えて解説した。

廣瀬氏は3月に発生した東北大震災後の原子力発電所の事故について、気象庁に在職時からの長い研究と調査に基づいて講演した。スリーマイル島やチェルノブイリなどの過去の事例を参考に取り上げて、汚染が大気の動きとともに世界中に拡散していくということを、シミュレーションで明確に示した。福島の場合もまたしかり。汚染は福島近辺に留まらず、世界各地に伝播したことをデータによって明らかにした。

後期には、引き続いて、ウフィツィ美術館の問題など2度の講演会を計画している。

本プロジェクトの研究メンバーは、研究文献

などの資料の収集を精力的に続けている。また美術作品や各地のパブリック・アートなどの調査のために、研究旅行も行っている。聞き取り調査によるデータの収集や、展覧会で成果を問う所員もいる。

2年間のそれぞれの研究活動は、次年度に研究論文に纏められる。6つの論文の内容は多岐にわたり個々には独立したものだが、全体を通して今日の社会の中の芸術の姿が明らかになるはずである。